第四三〇回　青葉会　令和四年二月二十四日（木）（於：赤坂飯店　竹橋店）

選　者　川口孤舟

出席者　今井紀久男　川口孤舟　久米五郎太　佐藤ただしげ　星田啓子

投句・選句　伊賀山そらお　柿崎忠彦　後藤とみ子（新人）　小早健介　在間千恵
朱牟田恵洲　土谷堂哉　豊田ゆたか　中川雅夫　長谷見びん　古田昇　宮内規雄
山田けい子　山内天牛　山崎亜也　渡邊盛雄

選句のみ　重枝孝岳　庄司龍平　高橋敏郎　橋口隆　早川允章　福島正明　山本三恵

《互選句》〇は選者の特選　◎は孤舟選者の選

九点
◎銃声の間をおき二発山眠る　びん　（〇そ・紀・孤・五・千・恵・堂・啓・天）
玄関に小さき靴跡春の雪　天牛　（紀・忠・龍・敏・堂・ゆ・雅・啓・三）

八点
春立つや風吹くままに今を生き　ゆたか　（そ・紀・と・〇孝・隆・允・正・規）

七点
◎蕗味噌や親子三代左利き　盛雄　（紀・孤・と・龍・敏・堂・正）
床屋へと夫を仕向くる梅日和　とみ子　（紀・忠・〇恵・龍・〇堂・亜・盛）
碗包む反古に墨の香冴返る　仝　（紀・千・恵・孝・〇啓・亜・〇盛）

六点
空からの白い踊り子雪見酒　忠彦　（紀・〇龍・た・ゆ・雅・正）
峠道桜かくしに逢ひにけり　孤舟　（紀・健・五・た・正・三）
山寺の解けぬ算額朧月　仝　（紀・五・龍・た・び・〇三）
◎天意ときに理不尽にして春寒し　恵洲　（紀・孤・健・孝・允・三）

五点
◎接種了へ春めくお濠人の波　紀久男　（そ・孤・敏・び・け）
◎目に見えぬものほど怖し鬼は外　健介　（紀・孤・忠・ゆ・天）
恵方巻き謂われも知らず頬張れり　堂哉　（紀・昇・び・規・亜）
雪に更け出漁送る漁協の灯　びん　（そ・紀・恵・啓・盛）
木瓜咲くや緩き陽射しの庭の隅　啓子　（紀・千・び・雅・隆）
朝一番米研ぐ右手の水ぬるむ　仝　（紀・〇千・と・允・盛）

四点
病院をはしごする身や春を待つ　忠彦　（紀・そ・敏・允）
魚は氷に上りましらは木から落つ　孤舟　（紀・孝・昇・亜）
（上野・書道展）
端を折りカマラゾフ読む春寒し　仝　（紀・敏・正・昇）
四方の山朝日に映ゆる雪化粧　ゆたか　（そ・千・敏・允）
◎籠り居の奥の奥まで日脚伸ぶ　びん　（孤・千・雅・け）
◎つり雛を何度もくぐり人を待つ　けい子　（紀・孤・隆・三）
◎逝き方と生き方惑ふ涅槃西風　盛雄　（〇紀・孤・五・健）

三点

雪晴れの町を見下ろし宙返り　そらお　（紀・〇五・敏）
生真面目な團十郎偲び豆を撒く　紀久男　（忠・〇と・け）
（團十郎命日）
◎孫三人合格祈る鎮守様　仝　（孤・堂・天）
吉右衛門の至芸偲ぶ「俊寛」
冴え返る流人俊寛惻々（そくそく）と　仝　（健・敏・け）
胃カメラに癌即手術（オペ）や春検診　仝　（忠・〇健・敏）
満天の星の化身か犬ふぐり　孤舟　（紀・昇・盛）
千歳太夫
新しき「切」への期待梅開く　五郎太　（紀・た・雅）
短冊の切り目揃はず二月かな　仝　（紀・恵・び）
春兆す漢字の森に仮名もあり　五郎太　（紀・隆・昇）
春一番出かけませんか誰(たれ)か言ふ　千恵　（紀・〇昇・天）
雨戸開け吹いる風や春近し　ただしげ　（龍・隆・規）
放哉「咳をしても一人」に倣ひて
大嚏（くさめ）しても一人や真夜目醒め　恵洲　（紀・〇允・啓）
人気なき町の散歩や雪伴に　雅夫　（紀・正・盛）
寒の雨軒端の鳥等静かなり　仝　（紀・び・規）
◎園児らの目に星宿る犬ふぐり　昇　（紀・孤・ゆ）
気合込めコロナ退治と豆を撒く　仝　（紀・た・天）
手袋やひょいと片手の出てきたり　規雄　（忠・五・健）
慎ましく微光を受けて節分草　仝　（紀・孝・ゆ）
九つと八つ福豆老夫婦　天牛　（紀・と・堂）
早春の湖（うみ）見る観音目の優し　けい子　（紀・孝・ゆ）
白梅の枝に紅梅すまし顔　仝　（紀・た・規）

二点

三回目接種はせぬぞ豆を撒く　忠彦　（紀・天）
スキー板十字に高く青空に　五郎太　（隆・亜）
◎春来たる何はさておき野球なり　千恵　（紀・孤）
乾布摩擦続けし母の三回忌　堂哉　（紀・規）
水鳥の浮き上がり来ぬ川面かな　びん　（紀・雅）
二月（にんがつ）の小川の流れ愛唱歌　規雄　（紀・三）
凍解の待たるる大地ウクライナ　亜也　（紀・啓）
晩学の不易流行梅開く　盛雄　（紀・恵）

一点

東御苑
天皇（すめらぎ）の梅林抜けて句座急ぐ　紀久男　（け）
雪解川水流れ行き人去りぬ　健介　（紀）
落椿三島由紀夫の最期とも　孤舟　（け）
グレイスと言ふ冬苺美形なる　千恵　（紀）
日の光受けて北窓開きけり　ただしげ　（紀）
感動とゴタゴタ多し冬五輪　仝　（紀）

春浅し悲喜こもごもの五輪かな　仝（紀）
しゃらしゃらと樋伝い落つ雪解水　啓子（紀）
紅梅や幹の紅（くれなひ）吸ひ上げて　仝（紀）
日ハム新庄監督
背番号1のお披露目春キャンプ　仝（紀）
蕗の薹店にはありて庭は未だ　亜也（紀）

※　※　※　※　※

【句　評】

九点句

銃声の間をおき二発山眠る　びん

孤舟さん・・・「またぎ」の世界。「銃声二発」により、獲物を仕留めた際のドラマが伝わってくる。

そらおさん・・雪山に猟銃の音が響いた後の静けさが際立つ？

五郎太さん・・想像を掻き立たせられる句です。山眠るがいいですね。

千恵さん・・・こんな状況に遭遇するなんてめったにないことですね。ちょっと緊張するような感じが良いです。

恵洲さん・・・乾いた銃声の跡、また静けさを取り戻す冬の山。山眠るの季語がきいている。

堂哉さん・・・季語が抜群。音が耳にこだまします。二発目で仕留めたかな？

天牛さん・・・間を置き二発がきいていますね。森閑とした様がよくわかります。

玄関に小さき靴跡春の雪　天牛

堂哉さん・・お孫さんが、振りだした雪に喜んで駆け出したのですか？靴跡が残るほど降ったのですね。今年はよく降りましたね。

ゆたかさん・・小さき靴跡が愛らしいです。

啓子さん・・・お孫さんの靴跡。その可愛い靴跡にも愛情が向けられています。

八点句

春立つや風吹くままに今を生き　ゆたか

とみ子さん・・あっさりとしたご気性が、寅さんのようです。

孝岳さん・・・季節の移ろいを身に感じながらも、気儘に生活する幸せを羨ましいと感じました。僕もそうしたい。

隆さん・・・・何度も迎えた立春。生きていても風になれる。

七点句

蕗味噌や親子三代左利き　盛雄

孤舟さん・・・酒の肴に蕗味噌は最高。飲兵衛三代の酒量はますます増える。

とみ子さん・・季語から左ぎっちょではないかと分かりました。

敏郎さん・・・目の付け所というか着眼点の面白さ‼

堂哉さん・・・蕗味噌を代々伝えておられるのは麗しいご家庭です。さぞや美味しい味噌でしょう。

床屋へと夫を仕向くる梅日和　とみ子

恵洲さん・・「床屋へ行っておいでよ、お前さん」と送り出している落語のおかみさんのようで面白い。

龍平さん・・アナタ髪ちょっと気になるネ・・愛の気遣い季節毎。
堂哉さん・・むさ苦しくなった夫を送り出す妻の声が聞こえてきます。良い天気ですから、それじゃあと重い腰も上がることでしょう。因みに、コロナになってから、我が家では家内が床屋です。
亜也さん・・親切心と素直に受け止めましょう。なお、「る」はあらずもがな。
盛雄さん・・OB になると散髪屋に行くのが億劫になりがち、微笑ましい句ですな。

碗包む反古に墨の香冴返る　　とみ子

恵洲さん・・・反古のかすかな墨の香に冴え返る寒さを感じた感受性に敬意。
啓子さん・・・墨の反古紙は強く、防虫にもなると云う。書初めで出た反古は乾かして碗を仕舞うときに使ったものです。季語が効いて、背筋の伸びた主の昔ながらの仕舞い方がきりりと美しく感じられます。
亜也さん・・・言外に伝わってくる正月の余韻。
盛雄さん・・・大切な朱塗りの碗を正月の行事も終えて和紙に包む。微妙な墨の香を感じた繊細さ・・・。冴返るの季語が良い。

六点句

空からの白い踊り子雪見酒　　忠彦

龍平さん・・この世の数少ない幸せの時間帯。最近何処か新聞で見た句
〝天帝の粋な計らい風雨す〟
ただしげさん・・中七の表現が面白く、それを見ながらの雪見酒が楽しい。
ゆたかさん・・「白い踊り子」の表現が斬新です

峠道桜かくしに逢ひにけり　　孤舟

ただしげさん・・桜が咲いている峠道で雪に会いその情景を桜隠しとの表現がよい。

山寺の解けぬ算額朧月　　孤舟

ただしげさん・・解くために奉納した算額に下五の朧月の対比よい。

天意ときに理不尽にして春寒し　　恵洲

孤舟さん・・・プーチンのウクライナ侵攻の決断は極めて理不尽。行く先が案じられ心寒くなる。
健介さん・・・プーチンも理不尽ですね。

五点句

接種了へ春めくお濠人の波　　紀久男

孤舟さん・・・梅も咲き始めた皇居お濠端。ワクチン接種を終え、三密から解放された多くの善男善女が、ジョギングや散策を楽しんでいる。

目に見えぬものほど怖し鬼は外　　健介

孤舟さん・・・目に見える災いには対処方針もあろうが、予期せぬ突然の災いは怖い。
ゆたかさん・・同感です。

恵方巻き謂われも知らず頬張れり　　堂哉

亜也さん・・・コンビニ商法への東京人のちょっとした皮肉の味。
紀久男・・・・関西だけの風習が今や全国区。商魂逞しい関西商法。関西出身の堂哉さんが知らないとは面白い。

雪に更け出漁送る漁協の灯　　びん

恵洲さん・・・真冬の海に命がけで出漁していく漁師さんたち。雪の中の漁協の灯

に頭が下がります。
追記・目黒区は宮城県気仙沼市と姉妹都市で毎年、秋刀魚祭の秋刀魚が送られてきます。小生は気仙沼の「漁師カレンダー」を買ってきて愛用しています。

木瓜咲くや緩き陽射しの庭の隅　　**啓子**
隆さん・・・・木瓜は街を歩きながら垣根によく見る。なぜか午後の弱った陽が似合う。

朝一番米研ぐ右手の水ぬるむ　　**啓子**
千恵さん・・・真冬の米研ぎは水が冷たすぎます。少しそれがやわらいだ時に春が近くなったのかなと感じたりしますね。
とみ子さん・・お米を研ぐ時 敏感に水の変化を、感じられたのでしょう。朝ご飯おいしそう！
盛雄さん・・・季節感溢れる佳句。下五の水ぬるむが決まりました。

病院をはしごする身や春を待つ　　**忠彦**
天牛さん・・・人間ほど悪い奴はいないですからね‼

魚は氷に上りましらは木から落つ　　**孤舟**
亜也さん・・・ナンセンスユーモアの味あり。

（上野・書道展）

端を折りカマラゾフ読む春寒し　　**五郎太**
敏郎さん・・・訳者を変えたりして何回か読んだ愛読書。こうした長編はやはり冬が似つかわしい。

四方の山朝日に映ゆる雪化粧　　**ゆたか**
千恵さん・・・雪国に住むのはつらいですが、こんな風景が観られるのも雪国ならでは。いいですね。
敏郎さん・・・雪国育ちには大変懐かしい冬の朝の光景です。

籠り居の奥の奥まで日脚伸ぶ　　**びん**
孤舟さん・・・連日外出を控え部屋に籠っていると、窓から差し込む日差しが日増しに伸びていることが解る。
千恵さん・・・籠る時間が長くなっている今日この頃ならではの観察眼と思います。

つり雛を何度もくぐり人を待つ　　**けい子**
孤舟さん・・雛祭りの特別展示がなされているデパートで待ち合わせ。飾り付けられたつるし雛の下を行ったり来たりして相手の現れるのを待っている。
隆さん・・・「つるし雛」。わが家には、宮崎県青島で買った貝のつるし飾りがある。不思議とくぐりたくなるのは何故だろうか。

逝き方と生き方惑ふ涅槃西風　　**盛雄**
孤舟さん・・・生き方は自分で選択出来ようが、死ぬときは神の差配に従うのみ。
紀久男・・・・今や人生百年時代。惑うのが当たり前です。季語の斡旋がぴったり。

三点句

雪晴れの町を見下ろし宙返り　　**そらお**
五郎太さん・・テレビに釘付けになった北京五輪の二週間余。スノボーかフリースキーの選手か、素直に読んだ句をいただきました。カメラがとらえ

るマイナス20度の空は実に澄んでいました。

生真面目な團十郎偲び豆を撒く　紀久男

（團十郎命日）

とみ子さん・・生真面目と伺って団十郎さんの舞台姿を親しみを持って思い出します。

孫三人合格祈る鎮守様　紀久男

孤舟さん・・・孫の合格を願うジージの気持ちが尊い。願う先が古臭い「鎮守様」で、高齢のジージが思われる。

堂哉さん・・・我が家では孫一人にやきもきしています。朗報が届きますように！

天牛さん・・・鎮守様がいいですね。きっと祈りが届くでしょう。

吉右衛門の至芸偲ぶ「俊寛」

冴え返る流人俊寛惻々（そくそく）と　紀久男

敏郎さん・・・吉右衛門の演じる瞬間は何時までも不滅です。

胃カメラに癌即手術（オペ）や春検診　紀久男

健介さん・・・現実を受け入れ即決された潔さとさらりと句に詠まれた意気に感動。

敏郎さん・・・大変なご体験をされたのですね‼

紀久男（自解）・小さいポリープ 10 個ほどありましたので八月初めに予約しました。

満天の星の化身か犬ふぐり　孤舟

盛雄さん・・・花図鑑で知る〝犬ふぐり〟ですが、中七の〝星の化身か〟と詠まれたセンスに感心。

千歳太夫

新しき「切」への期待梅開く　五郎太

ただしげさん・新たに「切り場」の語り手となり、その期待を梅の花になぞらえ春らしい。

紀久男・・・・文楽浄瑠璃の大詰めを任される最高位を一度に三人も就任した。珍しいが、夫々芸風は異なり楽しみです。下五が効果的です。

短冊の切り目揃はず二月かな　五郎太

恵洲さん・・・句会に使う簡易短冊かな。句会の即吟と見て一票。

春兆す漢字の森に仮名もあり　五郎太

隆さん・・・・仮名は森の中の萌いづる艸のよう。

春一番出かけませんか誰(たれ)か言ふ　千恵

昇さん・・・・青春の愛唱歌、キャンディーズの「春一番」の歌詞。「重いコートを脱いで出かけませんか もうすぐ春ですね 恋をしてみませんか・・」

あの頃は私も若かったな～

天牛さん・・・浮き浮きした様子に春一番がよくきいている。

雨戸開け吹いる風や春近し　ただしげ

龍平さん・・ここ2年程　我が朝ルーチンの開始です。もう　あの上司も居ないか？〝イエイエ　居られないのか？　でした〟等と想起して一日が始まります

隆さん・・・雨戸と縁側がある家でしょうか。季節を感じる構造物でもある。

「春近し雨戸を開けてはいる風」でも。

放哉「咳をしても一人」に倣ひて
大嚔（くさめ）しても一人や真夜目醒め　**恵洲**
允章さん・・・男やもめの寂しさ、切なさがうまく表現されています。
啓子さん・・・放哉はとても気になる俳人で・・この句はそのまま実感でしょう。

人気なき町の散歩や雪伴に　**雅夫**
盛雄さん・・・雪をお伴に散歩とは粋なものですね。

園児らの目に星宿る犬ふぐり　**昇**
孤舟さん・・・園児の清らかな目は星のごとくに輝いている。星の落とし子とも思われる犬ふぐりの輝きのように。
ゆたかさん・・『目に星宿る』の措辞が犬ふぐりの咲くさまを描いて見事です。

気合込めコロナ退治と豆を撒く　**昇**
ただしげさん・・節分の豆まきに鬼よりコロナ退治は世相を反映して面白い。
天牛さん・・・うまくコロナが逃げてくれるといいですがね。

手袋やひょいと片手の出てきたり　**規雄**
五郎太さん・・ちょっとシュールな軽さをいただきました。

慎ましく微光を受けて節分草　**規雄**
ゆたかさん・・・可憐な花の咲く様子が「慎ましく」の表現で見事に描かれています。

九つと八つ福豆老夫婦　**天牛**
とみ子さん・・　福豆の数え方が　ほほえましい。ステキなカップル♡
堂哉さん・・・一つ違いの兄さんか？金の草鞋の姉さん女房か？

早春の湖（うみ）見る観音目の優し　**けい子**
ゆたかさん・・「目の優し」という表現が早春とよくマッチしています。

白梅の枝に紅梅すまし顔　**けい子**
とみ子さん・・くすりと笑いました。
ただしげさん・白梅の枝に紅梅が咲いている状況に下五「すまし顔」がよい。

二点句

三回目接種はせぬぞ豆を撒く　**忠彦**
天牛さん・・・そういう元気があれば鬼（コロナ）も来ぬでしょう。

スキー板十字に高く青空に　**五郎太**
隆さん・・・・「フリースタイルスキー」北京春天に舞う。
亜也さん・・・ダイナミックな動きの一瞬を切り取ることの持つインパクト。

春来たる何はさておき野球なり　**千恵**
孤舟さん・・・野球キチガイにとって待ちに待った「球春」の到来。

凍解の待たるる大地ウクライナ　**亜也**
啓子さん・・ウクライナ国民の多くにとって唐突なロシアの侵攻。大地の凍り付く今だからの侵攻と聞く。春に入らんとする将に今、この無益な戦いの終結を熱望する。

晩学の不易流行梅開く　**盛雄**
恵洲さん・・老いてなお蕉翁の教えに学ぶ真摯さに敬意。

青葉会予定

令和四年三月二十四日（木）　正午～十五時　　於：赤坂飯店竹橋店　個室

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。締め切り：三月二十二日（火）中。

参加の可否、ご投句のご連絡は：今井宛FAXか郵送、或いは星田メール（keiko-reve@c07.itscom.net）までお願い致します。

郵便は三日かかります（土日の配達はありません）

■　■　■　■　■

青葉会報

一、今回は孤舟選者始め5名出席。投句はびんさん、新人の後藤とみ子さん（昨年亡くなられた後藤さんの奥様）をはじめ16名。会場は竹橋の赤坂飯店。12時～15時で、繁盛の時間帯でしたが円卓個室でぴったり。一寸贅沢ではありますが、孤舟選者から「桜隠し」＝春の雪のことを云うなど教えて貰い乍ら上海料理、紹興酒を賞味しつつ開始。五郎太さんのスピーディな披講順調に進み、ご覧のように、びんさんが好成績、新人のとみ子さんが初めてながら健闘されました。句会終了後は五郎太さん、ただしげさんと小生の三人で東御苑の満開の梅見坂経由大手門を歩きました。人出は殆どなく勿体なく感じました。

ウクライナ侵攻開始は21日（月）24日（木）句会当日の午後NHK BSで偶然にも「戦争と平和」（オードリーヘップバーン／ヘンリーフォンダ　1956年、米・伊合作）が放映されておりました。

二、関係者近詠

心痛み吾を否めど友櫨紅葉　眞希子
教会の文化財の扉聖樹光　仝
求道へ聖句讃美歌降る聖夜　仝
介護の手祈りへ組みてイブ礼拝　仝
郁子の実の落ちても割らぬ口信ず　弘子
どの影も家路家路の十三夜　仝
里芋やここからゆっくり主婦になる　仝
「レッドパージ」てふ書庫の一冊実南天　仝
日捲りの右傾左傾や十二月　仝

銀杏黄葉大団円のごとく降る　陽亮
救急車妻を攫ひて行く寒夜　仝
悲しみは見せじと冬帽深く深く　仝
寒薔薇の一輪を手に妹のがり　仝

吉右衛門追悼

芸極め二代目全う冬天へ　紀久男
仰ぎみる芸と人品冬落暉　仝
大播磨！声色真似て燗酒を　仝
酒徳利に折詰提げて顔見世へ　仝
ハーレムの教会に喜捨冬帽子　仝

――――――――

「森の座」三月号（横澤放川選）

太陽の匂ひは窓に春立ちぬ　盛雄
晩学の不易流行梅開く　仝
風花や出会ひ愉しき無重力　仝
啓蟄や屋根に古き金の鯱　仝
当てのなき独り散歩や冴返る　仝
逆らはず流れに任す番鴨　健介
大寒や糟糠の妻誕生日　仝

産土（うぶすな）参り「立春大吉」孫が引く　紀久男

吉右衛門の至芸を偲ぶ

冴返る流人俊寛惻々と　紀久男
冴返るダンボール住居のガード下　仝
佐渡金山の認可待たるる春吉報　仝

――――――――

「きさらぎ句会」二月

三、孤舟選者近詠

秋扇思ひ出ひとつ閉ぢにけり
門灯を点し忘れて十三夜
若君よいざ初陣の七五三
冬夕焼エンドロールのまだ続く
心中にまだ種火あり榾あかり

――――――「爽樹」三月号

四、盛雄さんの毎日新聞入選句　令和3年10月～令和4年2月　兵庫文芸　若林京子選

洞窟はあの日のままや沖縄忌　10月
蚊遣香木の家に住み五十年　〃
原発の塀に空蝉爪立てり　〃
容赦なく地軸を揺らす秋出水　11月
雲上の囁き聞こゆ秋彼岸　〃
花すすきいつも立派でなくていい　12月
夢追ひのボジョレヌーボー冬灯　〃
捨てきれぬ夢浮かびたる柚子湯かな　1月
雑踏に生きて米寿や冬菜摘む　〃
昇り来し力士の矜持四方拝　2月
立春大吉しかと大地を歩み行く　〃

五、「戦争が廊下の奥に立ってゐた」「玉音を理解せし者前に出よ」

3月5日　日経紙のコラム「春秋」に紹介している昭和初期に活躍した渡辺白泉の代表句です。テレビ等で毎日ロシアのウクライナ侵攻の残虐な無差別攻撃（病院や原発、避難する途中の女性や老人子どもへの攻撃）を放映。常軌を逸した独裁者「プーチンを理解せし者前に出よ」軍を退くべきだろうとしています。

令和四年三月八日　　紀久男　記